

舟橋村  
塚 越 I 遺 跡

2000. 3

舟橋村教育委員会

# 序

舟橋村は、県東部・富山平野のほぼ中央にあって、緑豊かで住み良い文化的な都市近郊農村を目指しています。近年は、人口増対策により、村外からの移住者が増加しております。

今回、稻荷地内において、宅地造成が行われることになり、それに先立ち、当地域の塚越Ⅰ遺跡の本調査を平成11年度に実施いたしました。

調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物跡が確認され、村の中世史を知る上で、貴重な資料となりました。

おわりに、調査実施および報告書の刊行にあたり、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係者各位にご援助・ご協力を頂きました。

衷心より感謝申し上げます。

平成12月3日

舟橋村教育委員会

教育長 藤 塚 孝 雄

## 例 言

1. 本書は、富山県舟橋村船橋に所在する塚越Ⅰ遺跡で、平成11年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、民営住宅地造成事業に伴う道路新設に先立ち、舟橋村教育委員会が実施。
3. 調査主体は舟橋村教育委員会であるが、調査実施にあたり富山県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けた。
4. 調査事務局は舟橋村教育委員会に置き土吉田昭博が事務を担当し、義務課長全森勝彦が監査した。
5. 出土遺物と調査に係る資料は富山県埋蔵文化財センターへ保管している。遺物の記述は、塚越Ⅰ遺跡を示す「塚越Ⅰ」に満ち年度・出土地点等を記した。また、本書に掲載した遺物は、コンテナに入れ収蔵してある。
6. 発掘調査担当者は次のとおりである。  
富山県埋蔵文化財センター 調査課長 宮田進一  
同 文化財保護主事 越前慶祐
7. 各年度の発掘調査面積は、平成11年度は約190m<sup>2</sup>である。
8. 本書の作成は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたり、越前がこれにあたった。
9. 本書は本文・計測表と卷末図版(浮図・写真図版)からなる。本書の浮図・写真図版の表示は次のとおりである。  
1) 遺構番号は遺構の種別ごとに付した。掘立柱建物-SB、土坑-SK、柱穴-SF、小穴-P、溝-SDと表記する。  
2) 本書で示す方位はすべて磁北。水平基準は海抜高である。  
3) 引用・参考文献は著者と発行年(西暦)を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。  
4) 土層の色調については、農林水産技術会議監修「新版標準土色鉛」(1994年版)に基づいている。  
5) 本文・図版・写真図版および各計測表・観察表中における番号は共通である。  
6) 遺構図版の縮尺は原則1/40、掘立柱建物平面図は1/60とした。  
遺物実測図版は1/3、遺物写真図版は等倍である。

## 目 次

### 本文目次

序・例言・目次	
1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経緯	1
3. 調査の結果	2
1. 基本序	2
2. 遺構	2
3. 遺物	2
4. まとめ	3
引用・参考文献	3

### 図版目次

第1図	周辺の遺跡
第2図	調査位置とグリット割り
第3図	遺構図(1)
第4図	遺構図(2)
第5図	遺構図(3)
第6図	出土遺物

### 写真図版

図版1	全景・土層断面
図版2	出土遺物

## I. 位置と環境

舟橋村は、富山県のほぼ中央に位置する。遺跡は、村南西部の稻荷地内から立山町塚越地内に広がる。常願寺川扇状地先端部の標高12~13m前後に位置し、八幡川と京坪川に挟まれた微高地に南北方向に広がる。過去の分布調査によって縄文時代～近世に至る遺物の散布がみられる〔立山町教委・富山大学人文学部考古学研究室 1998〕。遺跡内には塚越古墳が、西・南側には塚越Ⅱ・Ⅲ遺跡（縄文～近世）が位置する。また、京坪川を挟んで東側には竹内東芦原遺跡・仏生寺城跡（中世）が位置する。



1. 塚越 I 遺跡 2. 塚越 II 遺跡 3. 東芦原遺跡 4. 仏生寺城跡  
5. 竹内古墳 6. 小平遺跡 7. 浦田遺跡 8. 浦田馬鹿石遺跡  
9. 浦田支道遺跡 10. 大明神社跡

第1図 周辺の遺跡

## II. 調査に至る経緯

平成10年1月、民間不動産業者より宅地造成に伴い約5,360m<sup>2</sup>の農業振興地域除外申請があった。県埋蔵文化財センターと協議の結果、同年1月20日に分布調査、3月9・10日に試掘調査を行い、約1,350m<sup>2</sup>において塚越 I 遺跡の広がりが確認された。そのため、事業者と協議を行ったその結果、遺跡の広がりがみられない約3,800m<sup>2</sup>において事業が実施された（第1期工事）。

その後、平成11年7月、残りの部分において第2期分の造成計画がもちあがり、同年10月に農地転用の許可申請が出された。それを受け、県文化財課・県埋蔵文化センターとの協議を行い、道路部分の調査235m<sup>2</sup>について本調査を実施することとなった。実際の調査は、用水・県道路肩部分を除く約190m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査は11月8日より開始し、11月25日に終了した。実働日数は10日である。グリッドトマスは、南北方向をX軸・東西方向をY軸とし、調査区には直行するように任意に設定した。調査地は、遺跡の北西隅にある。

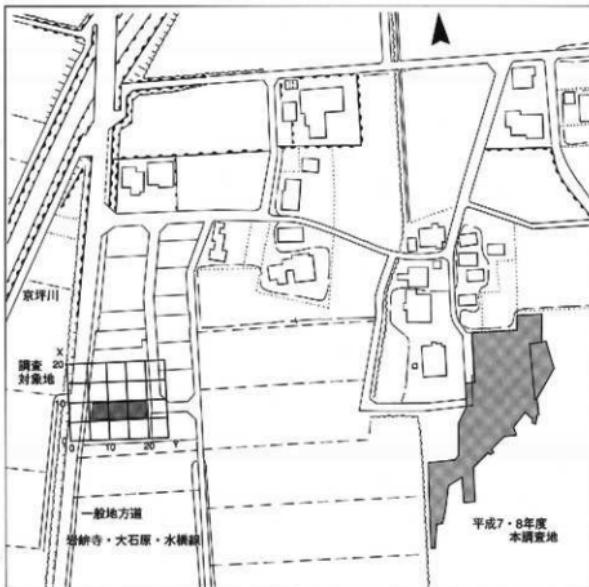


図2 調査位置とグリッド割り

### III. 調査の結果

#### 1. 基本層序（第3図）

表土直下（1層）には、黄灰色シルト質砂（2層）が厚く堆積し、近世水田耕作土・床土（3～5層）が数時期確認できる。その下層に暗オリーブ褐色粘土（6層）、黒褐色シルト質粘土（7層）、明黄褐色または黄褐色粘土（8層）が続く。7層は遺物包含層、8層は地山である。6層下半には鉄分の沈着層がみられ、6・7層には地山小ブロックが混ざる。地山をさらに掘り下げると黒色シルト質粘土層（9層）が確認できたが、無遺物層である。なお、2層の堆積時期は近世後期であり、1858年の飛越大地震後の洪水時の堆積物と考えている。

#### 2. 遺構（第3～5図）

遺構は、掘立柱建物柱穴出土のものを除いて、遺構からの遺物の出土がほとんどみられない。そのため、時期決定の決め手に欠けるものが多いが、中世前半のものと近世のものがみられる。掘立柱建物をはじめ主な遺構は、中世前半のものである。

**SB01・02（第4図）** 調査区西側で確認された。SB01は、調査区外に延びる縦柱建物でP2はSD01を切る。梁行3間以上桁行2間以上の南北棟と考えている。P6・7埋積土から上師器皿が比較的多く出土した。しかし、柱穴内上層部からの出土で、破片が多いことから意識的に埋納されたものではないと思われる。柱穴埋積土は、7層もしくは8層に類似したものおよび両層の混土である。柱穴は直径の割に深いものが多く、深さ80cm程度を測るものもある。柱痕が確認できたものも多い。SB02は、SB01北側に約40cmを隔てて「L」字に柱列が並ぶ。北側および西側に柱列が延びないこと、P12・9が他に比べて浅いことから柵列として捉えるべきかもしれない。出土遺物はない。

**SB03（第5図）** 調査区東側で確認された梁行1間桁行2間の小型側柱建物で、SB01に付随する建物と考える。建物平面形は歪み、柱穴規模はSB01に比べて小型である。遺物は、P2より土師器皿が出土している。

**SK03（第3図）** 長軸2.6m短軸2.2m深さ数cmの方形土壙である。SD02と切り合いがあるが、新旧関係は判然としない。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、SB01のすぐ東側に位置していることから建物に伴う可能性がある。

**SD05（第3図）** 調査区東端で一部が確認された。幅は不明であるが、深さは90cm程度を測る。出土遺物はないが、埋積土より近世段階の溝で、近世後半に埋没したと考えられる。

**SD04（第3・5図）** 幅・深さともに20cmあまりを測る。出土遺物は、弥生時代の繊片が若干出土したのみである。なお、その付近から縄文土器片が數片出土している。これらの遺物が、溝の時期を示すものはどうかは判然としない。

その他の遺構第3～5図 全体に浅いものが多くプランもはっきりしない溝・土壙がいくつか見られる。埋積土は、7層に類似した土に7層ブロックが混ざるものが多い。SK04・SD01から弥生土器が出土しているほか出土遺物はなく、時期決定は難しい。SK04・SD01の出土遺物が遺構の時期を示しているものかどうかは判然としない。

#### 3. 遺物（第6図）

遺物は、縄文時代～近世に至るものが出土している。層的には少なく浅箱で1箱程度である。そのうち遺構に伴うものは前章で述べたとおりであるが、岡化できたものは少ない。掘立柱建物柱穴出土の土師器皿（1～11）は、口縁端部をつまみ上げて三角形状に面取りするものが多く、底部からやや丸みをもって立ち上がるものが多い。また、口縁直下に幅の広いナデ調整を施す。口径14～15cm程度の大型のものと9～10cm程度の小型のものがある。時期は、13世紀前半である。なお、11はやや深くなることから、12・14のように古代の土師器碗である可能性もある。土師器碗の時期ははっきりしない。15は古墳時代の壺、16は弥生時代の蓋つまみである。17～18は越中瀬戸皿で、17は灰釉が、18は鉄釉が施される。19は、鉄釉がかかった小壺である。

## IV. まとめ

### 1. 中世について

塚越Ⅰ遺跡は、平成7・8年度に今回調査区の東約80mが調査され、報告書が刊行されている【舟橋村教委1997】。その結果、縄文時代～近世の遺構・遺物が確認されている。今年度の調査では、中世段階の遺構・遺物以外は明確ではない。そのため、中世について両地点を比較してみる。

先の調査では掘立柱建物が2棟確認されている。これらの建物はいずれも梁行1間の側柱建物である。この2棟の建物は、床面積44m<sup>2</sup>の中規模遺物と同6.7m<sup>2</sup>の小型の建物で、同時期に存在していた可能性があるとされている。直接建物に伴う遺物の出土がないため時期決定は困難であるが、包含層出土の遺物は15・16世紀のものが多い。その他の遺構は、清と若干の土坑がある程度で、遺構密度は高くない。

それに対し、今年度の調査で確認した掘立柱建物（ここでは、建物として断定しきれないSB02については除く）は、総柱建物1棟と側柱建物1棟である。SB01の床面積は不明であるが、中規模程度の建物と思われる。また、SB03は約5.7m<sup>2</sup>を測る小型の建物である。建物時期は、柱穴より出土している上師器皿の年代から、12世紀後半～13世紀前半頃と考えている。建物と同時期の遺構は、調査面積が小さいもあるがほとんどみられず遺構密度は高いとはいえない。

以上から、両地点は、時期的に重なりはみられない。両時期の遺構の広がりがどの程度であるかは不明である。しかし、八幡川が今回の調査区のすぐ西を流れていることから、この周りが遺跡の西端にあたることが考えられる。現在の福井集落の中心が先の調査地点北側にあることから、今回の調査地付近にあった古い段階の集落が東へ移ったと考える。

### 2. 基本層序2層：黄灰色シルト質砂について

基本層序でも述べたが、この層は、直径2～15mm程度の小礫が多く混ざり、透水性が高くガサガサした土である。前後の層界も明瞭である。一見したところ火山性噴出物か、それに起因したものと思われた。現水田下では15cm前後、道路下では40～50cm程度の厚さを測る。また、植物による擾乱作用や土壤化はみられない。この層は、調査段階で堅固に締まっており、人力で拡張した際には剝スコップでもなかなか歯が立たなかった。時期的には直下の水田耕作上・床土層出土遺物より近世後期（18世紀後半以前）を考えている。

この埋積土が火山噴出物とは考えられることから、水害による堆積の可能性を考えた。そこで近世後期の水害について関係資料【立山カルデラ砂防博物館 1998、立山町史下巻 1984】をみると、この周りに被害をもたらせたことが確認できたのは、1858年の「安政の大災害」である。この災害は、飛越大地震の後におこった土石流を伴う大洪水である。この大洪水の際には、大岩や大木が大量の泥と混ざりまるで固い粥が流れているようであったといい、この辺りも被災していることが分かる。現地における土層断面では、遺物や木などの自然遺物は確認できなかった点が気になるが、広い範囲で厚い堆積がみられることから、この洪水による堆積と推測した。今後、同様の層が被災したエリアで他にも確認されるか、自然科学分析などを実施する機会があることを期待する。

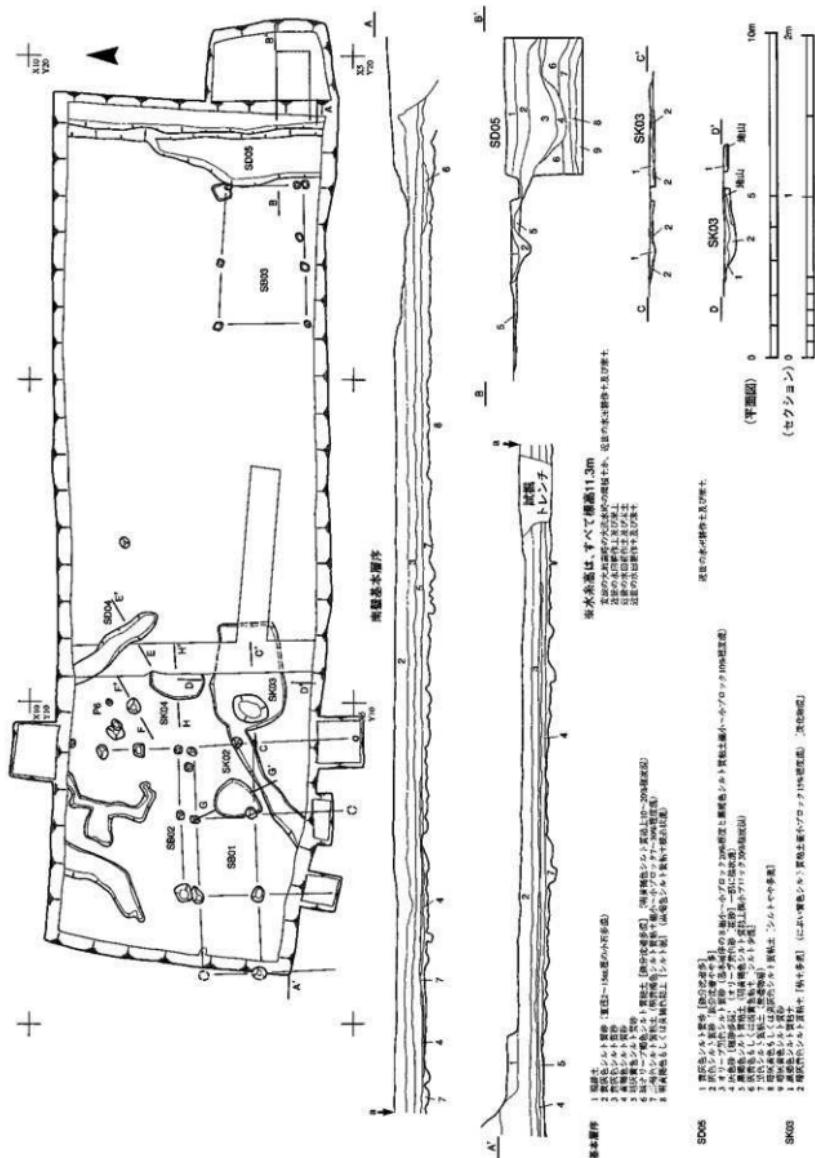
### 引用・参考文献

舟橋村教育委員会 1997 『塚越Ⅰ遺跡』第3・4次発掘調査報告書

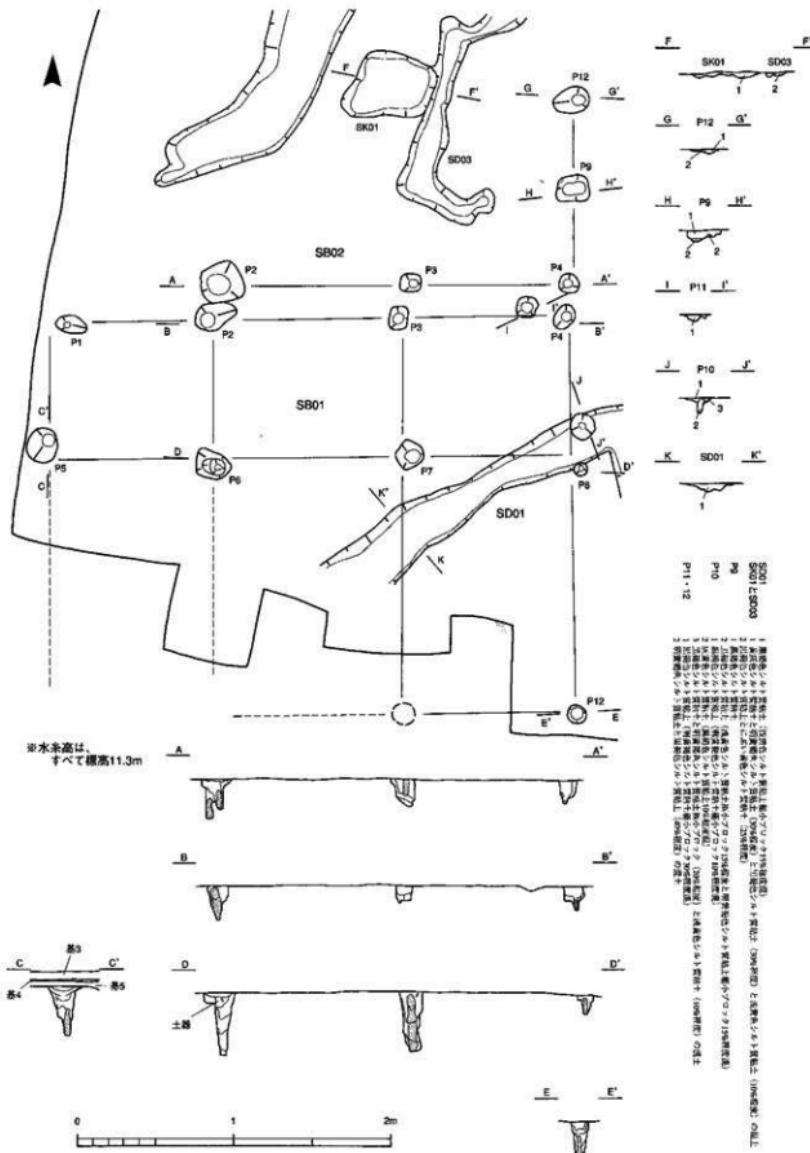
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1988 『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ 1987年度』

立山町 1984 『立山町史 下巻』

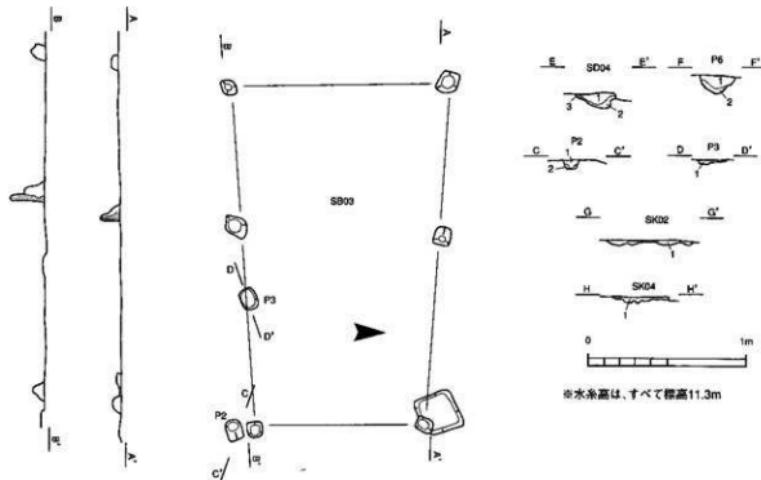
立山カルデラ砂防博物館 1998 『越中立山大崩れ』



### 第3図 遺構図(1)

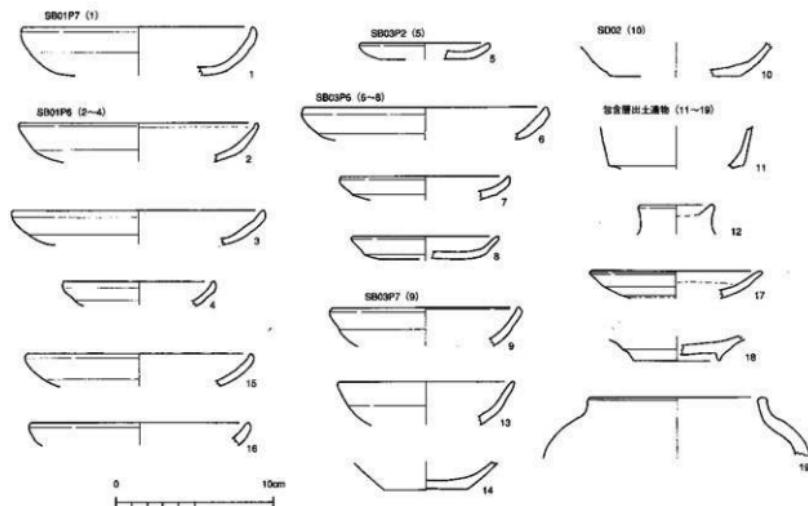


第4図 遺構図(2)

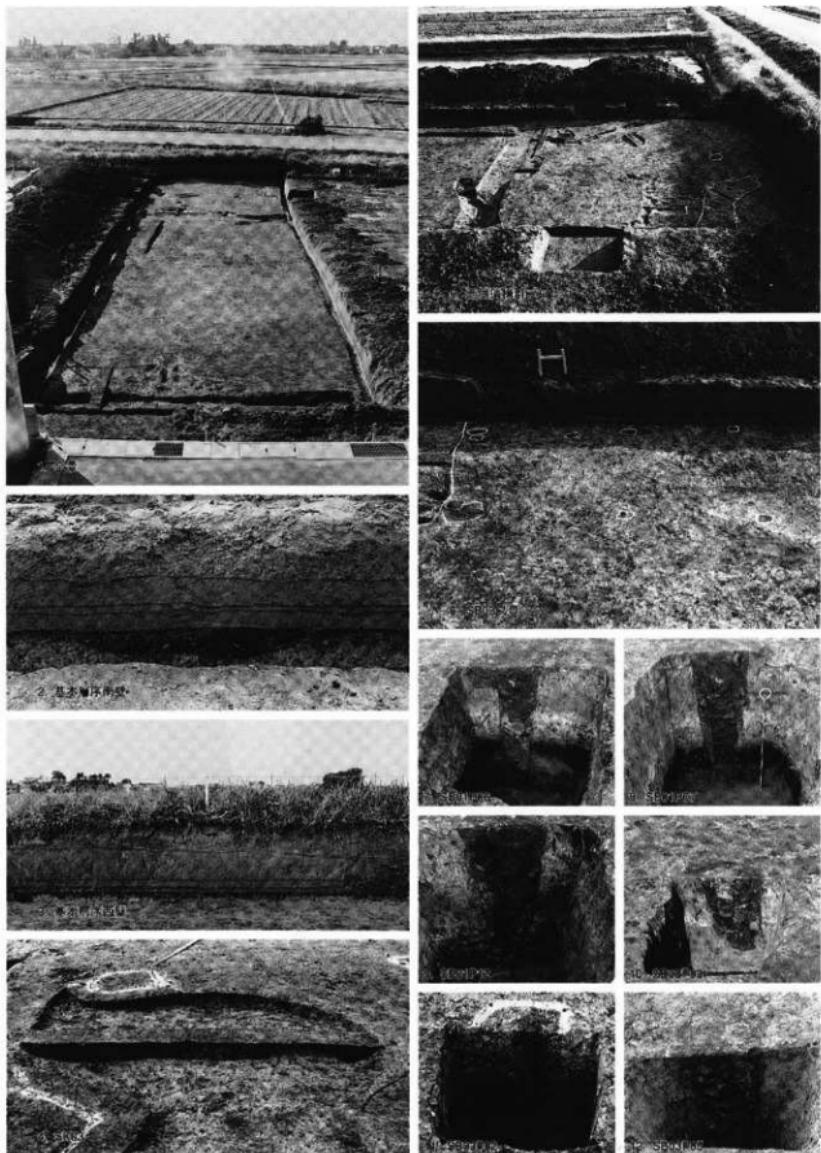


\*水系基は、すべて標高11.3m

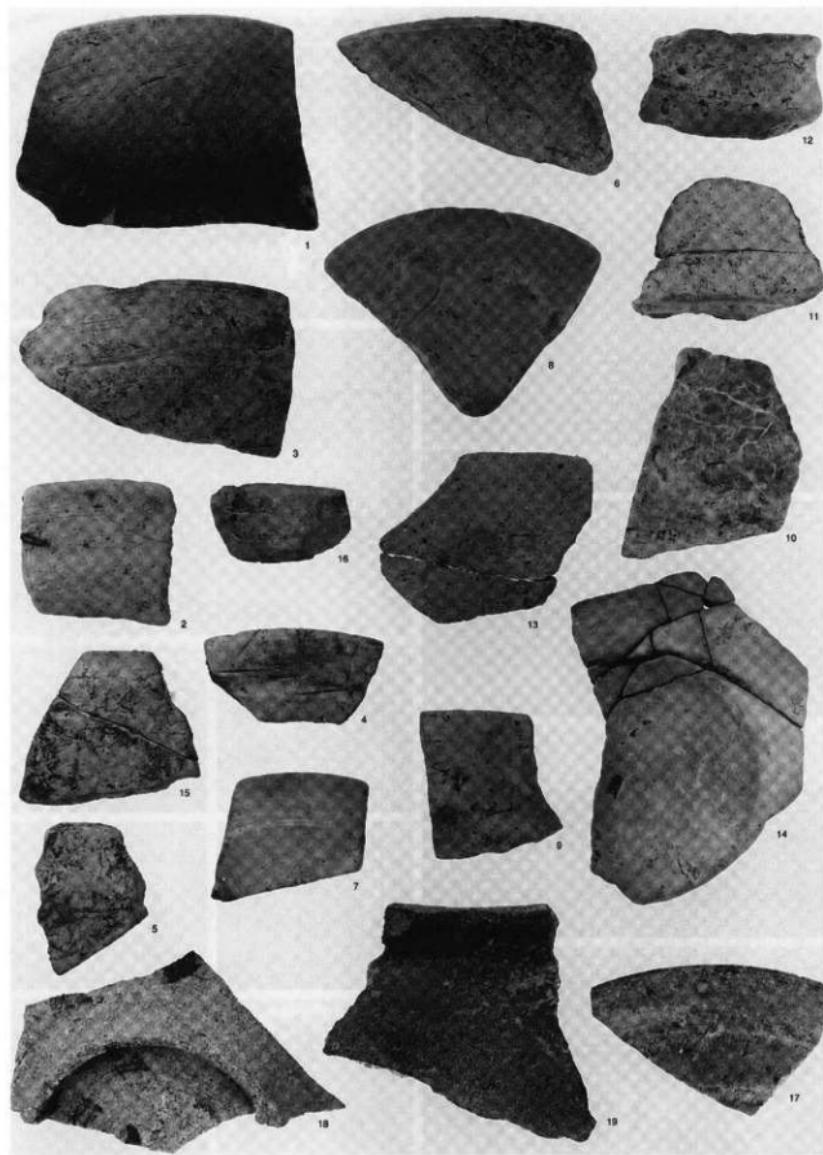
- SD04 1層赤色シルト質粘土上に(に)赤色セメントシルト質粘土層小ブロック15%混在  
2層白色シルト質粘土  
3層白色シルト質粘土  
SK02 1層赤色シルト質粘土と同質地質シルト質粘土(30%程度)と高含水シルト質粘土層小ブロック15%混在の層上  
SK04 1層赤色シルト質粘土と同質地質シルト質粘土層小ブロック15%混在の層上  
P2 1層赤色シルト質粘土  
P3 2層赤色シルト質粘土上(赤色シルト質粘土層小ブロック15%混在)  
P6 1層赤色シルト質粘土上(赤色セメントシルト質粘土層小ブロック15%混在)  
2層各色シルト質粘土(淡青色シルト質粘土層小ブロック15%混在と明黄色シルト質粘土層小ブロック15%混在)



第5図(上) 造構図(3)、第6図(下) 出土遺物



図版1 全景・土層断面



図版2 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけんなかにいかわぐんふなはしむらつかごしいちいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	富山県中新川郡舟橋村塚越Ⅰ遺跡発掘調査報告							
編著者	越前慶祐							
編集期間	舟橋村教育委員会富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0295 富山県中新川郡舟橋村仏生寺55 TEL076(464)1121 〒930-0115 富山県富山市茶屋町206-3 TEL076(434)2814							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
塚越Ⅰ遺跡	富山県中新川郡 舟橋村福井	市町村 16321	321009	36° 41' 10"	137° 18' 36"	11月8日 ~11月26日	190m <sup>2</sup>	道路新設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
塚越Ⅰ遺跡	集落	中世前期(13世紀)		掘立柱建物・土坑・溝		弥生土器、中世土師器、越中漬戸、肥前系陶磁器		

舟橋村埋蔵文化財調査報告書 5

富山県舟橋村  
塚越Ⅰ遺跡発掘調査報告書

発行日 平成12年3月31日  
発行 舟橋村教育委員会

〒930-0295  
富山県中新川郡舟橋村仏生寺55  
TEL 076(464)1121

編集 富山県埋蔵文化財センター  
印刷 北日本印刷株式会社

